



SPECIAL REPORT

第一に生活への目線、患者に寄り添う整形外科。

整形外科特集

患者一人ひとりの生活背景を理解し、日常を取り戻すために全力を尽くす。

CHAPTER 01 退院後の生活を見据え 最善の治療を提供する。

BACK STAGE

コロナ禍であっても
早期の手術が必要。

●コロナ禍で、人工関節などの予定手術を延期している人が多いという。ただ、必要な手術を先延ばしにすればするほど、痛みから体を動かさなくなり、結果として要介護になるリスクは高まる。

●西尾市民病院では徹底した院内感染予防策に取り組み、患者の受け入れに努めている。生活の質を維持するために欠かせない手術であれば、主治医とこまめに連絡を取り、早期の治療計画を立てていくことが望ましいだろう。



CHAPTER 02 整形外科の治療だけでなく 全身状態を管理していく。

人工骨頭置換術に参加した若手の内藤は現在、入職3年目。2年間の初期臨床研修を経て、整形外科に進むことを決意した。今は専攻医（専門医）をめざして研修プログラムを実践中の医師）として、日々研鑽を積んでいる。「整形外科は、歩けなかつた人が手術で歩けるようになるなど、治療の成果をダイナミックに感じられるところに魅力を感じました。3年目で主治医に任されるようになりました、責任の重さを実感しています」と内藤。主治医の責任とは何かと尋ねると、「全身を診る」という答えが返ってきた。「高齢の患者さんが多いので、手術がうまくいくとも、入院中に筋力が落ちたり、食事がとれなくなったり、慢性疾患や認知症が悪化することもあります。そういう全身の状態に目配りしながら、早期退院をめざしていく難しさがあります」と内藤は語る。そのために内藤

が説明していくのが「元のよう歩けるようになるのか」「認知症が悪化しないだろうか」などいくつもの質問が出て、そのたびに加藤は共に考えながら、丁寧に返答していく。同院では近年、こうしたインフォームド・コンセントに、より一層力を注ぐようになったといふ。その理由について、整形外科部長である犬飼規夫は次のように語る。「西尾市は全国的に見ても高齢化が急速に進んでいます。当科でも80代、90代の患者さんも珍しくありません。そこまで高齢になると、退院後的生活が家族の一番の心配」とになります。どう

ことになつたのだ。「人工骨頭置換術は安全性の高い治療法である」と。手術後は速やかにベッドの起き上がりや歩行の練習をしていくこと。その後、症状に応じて回復期リハビリテーション病院に転院し、訓練をしていく」となどを、加藤はわかりやすく説明していく。家族からは「元のようになっていくこと」がわかつた。加藤は人工骨頭置換術がふさわしいだろうと判断、家族に提案することになったのだ。「人工骨頭置換術は安全なだらうか」などいくつもの質問が出て、そのたびに加藤は共に考えながら、丁寧に返答していく。同院では近年、こうした整形外科部長である犬飼規夫は次に語る。「西尾市は全国的に見ても高齢化が急速に進んでいます。当科でも80代、90代の患者さんも珍しくありません。そこまで高齢になると、退院後的生活が家族の一番の心配」とになります。どう

やつて以前の生活を取り戻していくか、どの治療法を選ぶのが最適か、じっくり話し合つよう心がけています」と説明する。

加藤の説明に安心した家族の承諾を得て、数日後、人工骨頭置換術が行われた。執刀医は加藤、その傍らに犬飼をはじめとし、金属製の人工骨頭を固定していく。手術は1時間余りで、無事に終了した。「整形外科は現在医師6名体制で、ベテランと若手がバランス良く配属されています。手術のパフォーマンスも一層向上していると思います」と加藤は自信をこじませる。

COLUMN

●西尾市民病院の整形外科では、月に一度、患者の生活を支える診療所の先生方を招き、ミーティングを開催。医師同士が顔を合わせ、紹介された患者の治療経過について報告し、金属性の人工骨頭を固定していく。手術は1時間余りで、無事に終了した。「整形外科は現在医師6名体制で、ベテランと若手がバランス良く配属されています。手術のパフォーマンスも一層向上していると思います」と加藤は自信をこじませる。

●市民病院と診療所の医師が顔の見える関係を築くことにより、入院治療と在宅療養を一本の線で繋ぎ、継続した医療を提供。市民が高齢になつても安心して暮らしていけるよう支えていく。